

犬と猫の尿路結石

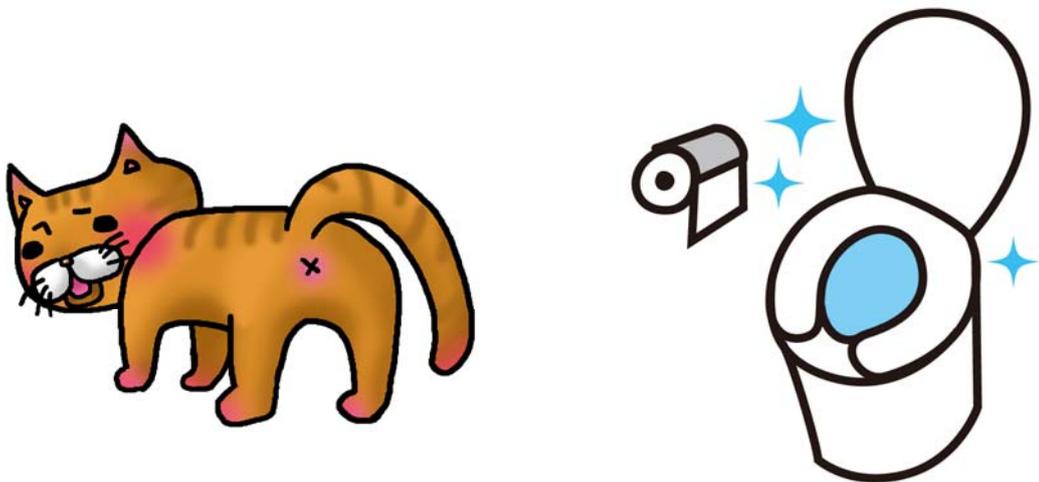
尿路結石について

犬や猫にもおしっこに石が出来ることがあります。おしっこは腎臓で作られ、尿管を通過して膀胱に一時的に溜められ尿道を通過して体の外に排泄されます。この通り道に出来る結石を尿路結石といいます。

人では腎臓に結石が出来ることが多く、それが尿管に引っかかって腰背部に激しい痛みを起こすと言われていています。犬や猫では人のような腎臓や尿管に結石が出来ることは比較的まれで、多くは膀胱で形成されます。膀胱は空間容積に余裕があるため結石が出来ても、人のように背中中の痛みを訴えることはありません。一般的な症状は結石が膀胱の粘膜を傷つける事によって起こる血尿や頻尿です。結石が尿道に詰まってしまうと排尿困難になり食欲低下や嘔吐が見られ、放っておくと急性腎不全を発症し死に至る場合もあります。雌よりも雄の方が尿道が細くて長いので、より詰まりやすい傾向があります。

尿路結石の原因

結石が出来てしまう原因は数多くあり、体質や食餌、飲水量、細菌感染、ストレス、遺伝性疾患などがあります。結石の成分であるカルシウムやマグネシウムなどのミネラルを過剰に摂取すると、尿中のミネラル濃度が上昇し結石が出来やすくなってしまいます。また、水を飲む量が少ないと、尿の貯留時間が長くなり、かつ濃度が濃くなりますので危険性が上がります。



尿路結石の治療

尿路結石の治療は結石の種類や場所によって異なります。結石はその成分によって数種類に分けられ、ストルバイト結石（リン酸アンモニウムマグネシウム）と呼ばれる結石は内科療法で溶かすことも可能です。しかし、大きさや数によっては外科的な摘出が必要なケースもあります。ストルバイト以外の結石は内科療法で溶解させる事が出来ませんので、手術による摘出か、あるいは結石による QOL（クオリティ オブ ライフ＝生活の質）の低下がなければ維持的な内科療法を選択するか検討します。尿道に結石が詰まってしまい膀胱がおしっこでぱんぱんになってしまったら、直ちに閉塞を解除し排尿させる必要があります。

尿路結石は個体の体質や生活習慣に関係して出来るので、再発が多いことが知られています。再発を防ぐには定期的な検査と、長期的な内科療法や食餌療法が必要です。猫では特発性膀胱炎といって原因の特定出来ない膀胱炎から結石が再発することがあるので、より注意が必要です。普段からおしっこの色やにおい、回数、量、出方などを把握し、おかしいと思ったら早めに動物病院に相談しましょう。

尿路感染症

尿路感染症の原因

腎臓から膀胱、尿道までのどこかに細菌が感染することを尿路感染症といい、細菌の感染により炎症をおこします。菌は通常尿道から侵入する為、尿道が短いメスのほうが感染しやすいです。尿路感染の時によく見られる細菌は大腸菌やブドウ球菌など、体の表面にいる細菌です。普段は体のバリア機能（粘膜や免疫力）が細菌の侵入を防いでいますが、ストレスや様々な病気、免疫力を下げる薬等でバリア機能が下がると細菌の感染がおこります。

また、膀胱は排尿が始まると全ての尿を出し切るようになっています。細菌は尿で増えることができるので、体は尿を残さないようにしているのです。尿は尿道に入り込んだ菌を押し流す働きもあります。ペットがトイレを我慢しないといけないう状態だったり、下半身の神経に障害があつて尿がちゃんと出されない時に膀胱炎になりやすいのはこの為です。

尿路感染症の症状

尿道や膀胱に感染がおこると、トイレが近くなります。膀胱炎からの残尿感のために、溜まってもいないおしっこをしようと何度もトイレに行くため、おしっこが出ていないように見える事があります。また、尿が濁ったり血が混ざったりします。尿の臭いも変わってきます。

また、膀胱の中で細菌が繁殖して、その生成物の影響でおしっこが強いアルカリ尿になってしまうと、ストラバイトという結石ができやすくなります。結石ができてしまうと、ますます膀胱や尿道の炎症が酷くなります。また、尿路感染症が悪化して腎臓に細菌が感染すると細菌性腎炎を引き起こしてしまい、腎不全や、最悪の場合敗血症にまで発展して命が脅かされる事もあります。

尿路感染症の治療

尿路感染症はひとたび発症してしまうと自力ではなかなか治りにくい病気のひとつですので、いつもよりおしっこの回数が多くなったり、トイレに行くわ

りには出ていないなど、排尿異常を感じたら、すみやかにかかりつけの動物病院に相談しましょう。おしっこの検査やエコー検査などを経て、尿路感染症と診断がつくと、治療には抗生物質を投与します。結石がある場合には、専用のフードやサプリメントを併用します。投与開始して少しすると症状が治まりますが、しっかりと菌を退治しきってしまうまで治療を続けないと再発を何度も繰り返してしまい、慢性化したり悪化させてしまう事もありますので、ご自分の判断で治療をやめないようにしましょう。